



特集 英連邦戦死者墓地から平和を学ぶ

捕虜となり日本で死んだ多くの兵士に心に留めて

横浜で保土ヶ谷の歴史散歩といえば、「英連邦墓地でしょう、ダイアナ妃も来たんですよ。」と横浜の歴史好きは言う。イギリス及びその植民地だった国の人たちは、外国で亡くなるとその国に葬られる決まりだから、と知っている。そして一度は訪れて、その広々とした空間に整然と並ぶ墓石を眺め、「きれいな所ですね」と思うのである。けれども、その先のことは何故か深くは考えない。ここに眠る多くの兵士たちが、捕虜として連れて来られ、どんな運命をたどったのかを。尊敬していた兄がニューギニアで戦死し、その慰霊を現地で行ってきた酒井氏は、日本で、横浜で、あったことの実事を受け止め、この英連邦戦死者墓地から平和を学び、不戦の誓いを伝えている。

酒井 伴美

編集：わたなべとしこ

目次

はじめに

1. 近くに住んでいた二人の女性、笹本妙子さんと田村佳子さん —名誉大英勲章 MBE を授与される—
2. 国内に 100 か所以上あった捕虜収容所
3. 横浜市にあった主な捕虜収容所及び派遣所 (POW 研究会ホームページから)
4. 各所の特色・逸話など
 - (1) 東京第 1 派遣所 (横浜三菱ドック) 暴力が蔓延、赤十字小包は職員が私物化
 - (2) 東京第 3 分所 (横浜球場) 所長は僧侶出身、日本一居心地がよかった
 - (3) 東京第 1 8 派遣所 (横浜耐火煉瓦) 楽器が購入され自由時間に演奏して楽しむことも

- (4) 東京第19派遣所（横浜船舶荷役） 日本人と同じ弁当を支給、ミナトのおやじもいた
- (5) 東京第14分所（東芝鶴見工場） 虐待死が横行も、女学生の弾くピアノに癒された
- 5. 堀割川のほとりに捕虜収容所があった —所長は戦後 軍事裁判で有罪—
- 6. 私の新聞投稿掲載記事から
 - (1) 稲木所長の孫娘に感銘 岩手日報 【日報論壇】 2021. 8. 18
 - (2) 伝え続けたい不戦の思い 岩手日報【日報論壇】2022. 2. 4
 - (3) 戦争での死者を忘れない 神奈川新聞 2022. 2. 10

おわりに

1. はじめに

横浜市保土ヶ谷にある英連邦戦死者墓地（下記の注1、注2、注3）には何度か足を運んでいる。広い敷地に、整然と並ぶたくさんの墓石、綺麗に管理されたこの墓地を歩くと、あの太平洋戦争で日本軍の捕虜となり、強制労働をさせられたあと亡くなられた英連邦戦死者に思いを馳せる。特に私は、あの戦争で、ニューギニアでオーストラリア軍と戦って戦死した兄を持つことから、不戦への思いが殊更に強い。戦争が終わり、今は敵も味方もない。国のために若い命を犠牲にした人たちの霊を、只々慰めたいと思うのである。

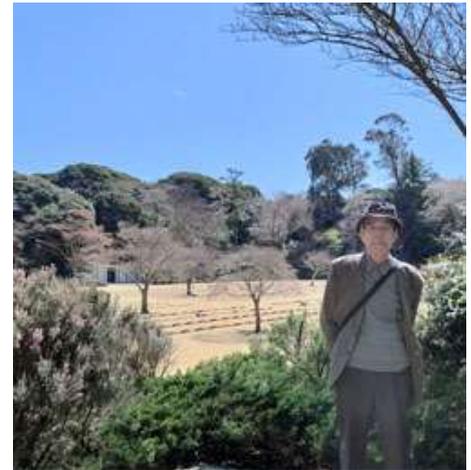
しかし、一般的にはここに眠る英連邦兵士のほとんどが、1941年から45年にかけて日本で捕虜として亡くなった若者たちであること、戦時下で悲惨で過酷な生活を過ごしたことはあまり知られていない。戦争のない平和を祈念し、彼らの霊を慰めるためにも、私は一人でも多くの市民が保土ヶ谷区狩場にあるこの英連邦戦死者墓地に埋葬されている戦争犠牲者たちに心を留めてほしいと願っている。

（注1）英連邦 Commonwealth of Nations（現在は **The Commonwealth** と表記することが多い）：イギリスと旧イギリス領植民地から独立した合計53か国で構成される国家グループ。この英連邦戦死者墓地には、イギリスとその植民地であったカナダ・オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカ共和国・インド・パキスタン各国の戦没者たちが埋葬されている。英連邦軍の規則で、戦死者はその地に葬るという決まりになっている。

（注2）約8ヘクタールという広々とした敷地に眠る御霊は1853柱。それぞれ、国家ごとに分けられた区域に葬られている。英連邦戦死者墓地は世界に2,500ヶ所、墓碑が一つや二つといった所を含めれば約21,000ヶ所あるという。世界各国にある中でも、横浜の墓地はとりわけ広いものようである。

（注3）この地は戦前は児童遊園地だった。戦後、日本は進駐軍に統治され、横浜はイギリスの管轄下に入る。1951年のサンフランシスコ講和条約により、ここを英連邦の戦死者墓地にすることが決定された。土地は永久貸与。埋葬されている者の殆ど、1700人余が日本国内の捕虜収容所で亡くなった将兵である。

上記注の参考資料：「連合軍捕虜の墓碑銘」笹本妙子、草の根出版会、2004年。「英連邦横浜戦死者墓地はどうして横浜につくられた？」はまれぼ.com、2011年07月21日。



筆者近影。英連邦戦死者墓地内のイギリス兵の墓地を臨める坂の途中にて

そのように思うようになったきっかけは、ある時、NHKのラジオ深夜便（2021年10月16日）で、墓地の近くに住む田村佳子さんが墓地に花を供えるなど英連邦戦死者の霊を慰めている放送を聴いて感動を覚えた。そして、改めて英連邦戦死者墓地の歴史などを見直してみることにしたのである。

1. 近くに住んでいた二人の女性、笹本妙子さんと田村佳子さん — 一名誉大英勲章 MBE を授与される —



Newsweek 日本版（2006年10月18日号）掲載の画像。
左が田村佳子さん、中央が笹本妙子さん、右は元英捕虜フランク・プラントンさん

（編集者注）1990年代後半、笹本妙子さんと田村佳子さんは、それぞれ英連邦墓地の近くに住んでいた。この墓地を訪れて、ここに大勢の若い兵士が埋葬されていることに衝撃を受けた。二人とも、この墓地のことをもっと知りたいと思い、当時管理人だったレン・ハロップ氏に会い、彼の仲介により二人は知り合い、意気投合した。笹本さんはジャーナリストの立場から活動、田村さんは優れた英語力で笹本さんを支え、英連邦墓地について調査、取材するようになった。2002年、各地にいた有志の人たちとともに、POW研究会を結成した。POW=Prisoners of War、戦時捕虜。
<http://www.powresearch.jp/jp/index.html>

古くなるが、1999年に朝日新聞に掲載された笹本さんの記事などから、活動の足跡を辿って見たい。

笹本さんは横浜市民でさえほとんど知らないこの墓地の歴史を調べ、多くの日本人に伝えていくことを決意した。捕虜収容所の資料については、終戦時に殆ど焼却されていて、調査は難航したが、元捕虜の書いた手記や、米国の公文書、横浜の軍事裁判などの資料を丹念に調べ、収容所の元軍曹などにも取材した。そして京浜地区にあった19か所の捕虜収容所の中間報告書を自費出版した。（「京浜地区の捕虜収容所・中間報告書」1999年）

その後、テレビ朝日系列で2002年春に1時間にわたり全国放映されたドキュメンタリー「212枚の認識票～英軍捕虜の傷痕と戦後補償～」(ABC、ドキュメンタリー工房制作)が放送されたが、その取材の調査に田村さんと一緒に協力した。この過程で思わぬ副産物を得られた。英連邦戦死者墓地に眠る1700人余のうち半数の人々の死亡地と死因が判明した。

外地での過酷な労働に耐え、地獄船で日本に運ばれ、港に着いた途端に息絶えた人々、何とか収容所に辿り着いたものの、飢えと病と虐待で、終戦まで生き抜くことが出来なかった人々、中には友軍の空襲や原爆で惨い死を遂げた人々もいた。笹本さんは全国に100か所以上あった捕虜収容所の実態を明らかにすべく、心を同じくする人々とともに2002年に「POW研究会」(Prisoners of War)を立ち上げて活動を続けている。墓地の追悼礼拝とも連携して、捕虜収容所問題を広く世に問うていきたいと言っている。

この二人の功績に対し、イギリスの女王の勲章授与を伝えるニューズウィーク日本版（2006年10月18日号掲載）の概要を報告して、二人を讃えたいと思う。

祖国日本では殆ど知られていない女性に、イギリスの女王が勲章を贈るのは稀有なこと。だが、勲章を贈られた田村佳子と笹本妙子は、まさに稀有の存在だった。神奈川県に住む二人はこの30年、第二次世界大戦中に日本に収容されていた戦争捕虜に関する情報を集めてきた。記録を隠し、過去の罪を忘れようとする風潮の中、事実の究明は困難を極めた。

元捕虜たちの苦悩を癒すため情報収集に「うむことなく献身」して来た二人に、駐日英大使館は2006年5月、女王に代わって**名誉大英勲章MBE**を授与した。

…長年の調査が実り、昨年ようやく英語のデータベースを公開できた。収容所で死亡した捕虜の記録など、貴重な情報が提供されている。

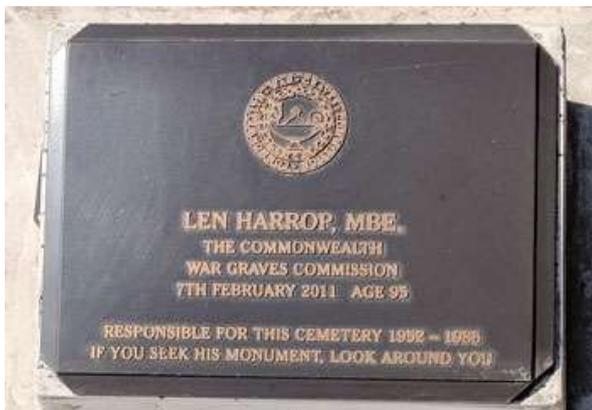
イギリスのワーウィックに住むリチャード・ブルッカー氏もその恩恵を受けた一人である。ブルッカー氏は日本で亡くなった母方の祖父の足跡をずっと探ってきた。「公表された情報はどこにもなかった。データベースで初めて詳細が分かったとき涙が出た。幼くして父親を失った母や祖父を知らない私にとって、(彼女たちは)英雄だ」 …中略…

二人は日本を訪れた元捕虜や遺族のガイド役も務めてきた。ブルッカー氏も母親とともに、二人の案内で祖父のいた収容所跡地や、保土ヶ谷の墓地を訪ねた。

田村佳子さん：英国女王様からの勲章授与の知らせは即日イギリスの大手新聞に載り、知り合いの元捕虜の人達から、また、数日後には英連邦の国々の新聞にも配信され、イギリスのみならず各国から賞賛のメール、手紙、電話まで頂き、却ってこちらが驚きました。

その中で、上記のプラントンさんからは「大使館での授与式に出席し、その後、自分のいた収容所巡りをしたいが案内してくれるだろうか？」との連絡があり、ご家族と共に来日されました。授与式、墓地訪問、そして彼のいた函館収容所と釜石の内陸の大橋分所と一緒に訪ねました。彼は釜石の艦砲射撃で負傷した捕虜たちの世話を軍医と共にしました。各地で市民の皆様との対話の会も開き、これも双方に取り、とても良い機会だったようです。多くの人達が「我が町にそのような歴史があったとは！」等、多くの感想を頂きました。この再訪の旅には笹本妙子さん、そして小暮聡子さんも一緒にお付き合いしました。

元捕虜の方達が来日されると、時間の許す限り、一緒に収容所跡地を巡るようにしています。



元管理人のレン・ハロップ氏の墓石
田村さん、笹本さんとともに、捕虜問題を究明。
墓地の生き字引のような人だった。

戦後墓地区域にひととき新しい墓石があった。それは、田村佳子さんと笹本妙子さんを引き合わせたレン・ハロップ氏の墓石だった。2011年に95歳で亡くなられていた。

田村佳子さん：彼には偶然お会いして以来、多岐に渡って実に沢山のことを教えて頂きました。私の人生の師だと考えております。

墓石の碑文“IF YOU SEEK HIS MONUMENT, LOOK AROUND YOU.”は、セント・ポール寺院を建てた建築家クリストファー・レンに因んで甥御さんが考えたもの。「どう思うか？」と聞かれ、「とても素敵。ハロップさんにぴったりですね」と

答えたのを思い出します。お身内が遺灰をイギリスよりお持ちになり、日本側はイギリス大使初め親交のあった大勢のもの達がお墓の前に集まり、経歴や思い出を話し、遺灰が墓石下に埋葬されるのを皆で見届けまし

た。心のこもった、とても良いお式でした。その後皆さんでお食事に繰り出し、ひとしきりハロップさんのお話をして皆で懐かしんだことを思い出しました

2. 国内に 100 か所以上あった捕虜収容所

私は以前チェリー・イングラム（日本の桜の世界的権威英国人イングラム氏が戦前、絶滅していた日本品種の桜を英国で育てていた）について調べた時に、北海道にあった捕虜収容所で過酷な強制労働に駆り出されたイギリス兵の捕虜に償いをするために、松前桜をイギリスに贈った浅利政俊（桜研究家）に感銘したのであるが、恥ずかしながら、その時まで、北海道にも捕虜収容所があったとは知らなかった。

また、岩手県の釜石捕虜収容所所長が捕虜に人道的な扱いをしていたのに戦犯にされ、巣鴨プリズンに収監されたことをラジオで聴いて知り、もう一つの捕虜収容所問題に出会った。（この所長の名譽を回復すべく奮闘された孫娘・小暮聡子氏については私の投稿記事にて後述する）

そして、英連邦戦死者墓地を調べているうちに、更に九州まで、全国に 100 か所以上（約 130 ヶ所）もの捕虜収容所があったことを知った。終戦時に国内外で約 13 万人の捕虜がおり、そのうち国内に約 3 万数千人の捕虜が連れて来られ、過酷な労働を強いられ、死んでいったものも数多い。そのことを思うと、戦争は絶対にあってはならないと強く感じる。

編集者注：彼らは主にアジア太平洋などで日本軍との戦いで敗れ、捕虜となったものたち。戦争が激しくなると日本国内では、若者たちが戦地に行ってしまう、炭鉱、鉄工所、造船所等での男の働き手がいなくなりました。この労働力不足を補うために船に乗せられ連行されて来たのである。



ビール兵卒墓石

ジョージ・ビール兵卒 →



「ジョージ・ビール兵卒について」（入口案内板の説明より） 彼は第二次世界大戦中オーストラリア軍に所属しました。ジョージと彼の兄弟のフレデリックは、1942年2月にシンガポールで捕虜となりました。彼は日本に収容され、製鉄所で強制労働させられました。ジョージは、24時間シフトの工場での事故で重傷を負った後、1943年5月28日に死亡しました。彼はオーストラリア区のE区画、A列、墓石3番に埋葬されています。彼の兄弟は戦争を生きぬき、

1945年9月に解放されました。©オーストラリア戦争記念 P01649.003

3. 横浜市にあった主な捕虜収容所及び派遣所（POW 研究会ホームページから）

編集者注：POW 研究会ホームページから、横浜市域にあった主な捕虜収容所・派遣所の報告書（笹本妙子氏作成）を抜粋・編集して掲載させていただきました。Web サイト上では表で表しましたが、ここでは紙幅の制約上、項目で示します。詳しいエピソードは、次の「4. 各所の特色・逸話など」に記載。

- ① 名称（通称）・存続期間・所在地
- ② 捕虜の数
- ③ 職員（所長、管理者等）
- ④ 死亡者数
- ⑤ 概要

- (1) ①**東京第1派遣所（三菱横浜ドック）** 1942. 11. 18～1945. 5. 13 跡地はみなとみらい地区、日本丸が繋留される1号ドックやランドマークタワービル下のドックヤードガーデン（2号ドック）に名残が。
- ②当初 493 名（米 291、英 171、豪 19、蘭 12）数字は他の資料とは食い違いがある。閉鎖後、仙台捕虜収容所へ移動
- ③初代所長は西沢正夫中尉、2代目は千須和武一中尉、3代目は本田中尉。職員全体の人数や詳細は不明
- ④54名（米 33、英 16、豪 3、蘭 1、ノルウエー1）が死亡しているが、開設時の人数と閉鎖時の人数が合わず、国籍別の人数も合わない。
- ⑤大半はシンガポールから輸送船「大日丸」で移送され、42年11月25日に門司に到着したが、このうちアメリカ兵は台湾から乗船した。彼らはもともと42年9月にフィリピンから「りま丸」で台湾に送られた者たち。橋本町の収容所から徒歩で通った。捕虜側の証言によれば「**東京地区では最悪の収容所**」と言われ、戦犯裁判では初代所長が絞首刑、2代目所長と軍属が終身刑、その他の職員もかなりの重罪に処せられた。
- (2) ①**東京第3分所（横浜球場）** 1942. 9. 12～1944. 5. 1 横浜スタジアムのある横浜公園内
- ②最大時 299 名で、その内訳は英 216、米 76、加 2、民間人 5
- ③林純勝中尉、その他の職員についての詳細は不明
- ④7名（英 5、米 2）。死因のほとんどが赤痢
- ⑤**所長は長野の善光寺の僧侶**だったが、大らかで人情味ある人物で、他の収容所の捕虜たちもみな彼のいる収容所に行きたがったという。労働場所は、横浜港内外、日清製油、東高島駅、国光練炭、神奈川造船、日本製粉、安田倉庫、浅野ドック、芝浦電気、横浜耐火煉瓦など
- (3) ①**東京第18派遣所（横浜耐火煉瓦）** 1944. 5. 1～1945. 6 磯子区西根岸馬場町8番地の（株）横浜耐火煉瓦の敷地内に開設
- ②横浜球場内の収容所からこの工場に通っていたが同所の閉鎖に伴ってこの派遣所が開設され、約 80 人（主に米兵と英兵）が収容
- ③初代の派遣所長は林純勝中尉、2代目が金綱竜吾中尉、両者とも他の分所、派遣所の所長を兼任。実質的な管理は副所長の飯田ヒロシ曹長と牛島甲彦軍曹。他、軍属 2 人、会社差出しの監視員 5 人と通訳 1 人)
- ④死者は出ていない。
- ⑤概して過酷な虐待は少なかったようである。下記「やぶにらみ磯子郷土誌」よりの詳細を参照。
- (4) ①**東京第19派遣所（横浜船舶荷役）** 1944. 5. 1～1945. 5. 29 中区山下町 32 番地に開設された。
ホテルニューグランドの斜め裏、現在、県税事務所がある辺り
- ②横浜球場内の収容所から新しく設置されたこの収容所に 48 名が移ってきた。
- ③派遣所長は、初代が林純勝中尉、2代目が田中中尉、3代目が金綱竜吾中尉。その他、軍曹 1 人、兵卒 1 人、軍属の警備員 4 人、会計や炊事担当の民間人 5 人
- ④死亡者は出ていない。
- ⑤横浜港近くの倉庫街に開設され、捕虜たちは港の荷役作業に従事した。1945年5月29日の横浜大空襲

で焼失し、他の収容所に移送された。報告書には「最後の2ヶ月間は、捕虜の半分は収容所から5キロほど離れたニットウカガクで働き、トラックかボートで通っていた」と記されている。

- (5) ①**東京第14分所（東芝鶴見工場）** 1943年末に開設されたが、たびたびの空襲により鶴見区内で4カ所も移動した。ここは非常に過酷な収容所だったが、近くに住んでいた女学生が弾くピアノ演奏に多くの兵士が癒されたという（下記参照）
- ②最大時には191人（蘭107, 豪50, 英22, 米12）いたと記されている。終戦の時点は121人（蘭72, 豪17, 英20, 米12）
- ③初代所長は上森正雄少尉、2代目は田中良平中尉。普段の管理は井野雅治軍曹。当初、会社が収容所を運営していたが、終戦近くになると空襲が激しくなってきたため、陸軍が管理するようになった。
- ④終戦までに44人（英2, 豪10, 蘭32）が病気や事故、空襲などで死亡とあるが、正確な数字かは不明。1945年4月15日と7月13日の空襲では**宿舎が直撃を受けて計31人が死亡した**。食糧は十分ではなく、住環境は劣悪、衣料が粗末、靴下なくボロをまとった状態だったため、多くの者が肺炎で死亡した。
- ⑤捕虜の多くは泰緬鉄道での過酷な労働を経て日本に送られたオランダ人やオーストラリア人だが、日本に向かう途中、乗っていた船が友軍に撃沈されて多数の仲間が海没するなどの憂き目にも遭っている。この工場で使役され、水銀灯の整流器を組み立てる部門で働いた。1944年12月16日に死亡したオランダ人捕虜に関しては、死亡者リストには「心臓脚気」と記されているものの、実際には日本人監視員の殴打が直接の死因であった。45年4月15日に死亡したオランダ人捕虜は「空襲により死亡」と記されているが、日本人軍曹によって斬殺された疑いが強い。

4. 各所の特色・逸話など

(1) 東京第1派遣所（横浜三菱ドック） 暴力が蔓延、赤十字小包は職員が私物化



1944年のクリスマス（米公文書館所蔵、工藤洋三提供）

倉庫を改造した建物が収容所に使われた。捕虜用宿舎は2棟で、他に事務所棟や病室棟などがあった。宿舎は2段の寝棚になっており、畳が敷かれていた。建物は貧弱で、冬は凍り付くように寒かったが、ストーブは2個だけで、氷点下でも1日2時間しか使えなかった。

この収容所では**暴力が蔓延**し、捕虜たちは些細なことで厳しい懲罰を加えられた。靴が擦り切れているだけで殴られ、枕カバーが汚れているだけで両手にバケツを持って数時間立たされた捕虜もいる。靴も枕カバーも天皇の下賜品だからという理由だった。

初代所長の西沢中尉は、病人点呼（その日仕事に出られるかどうかを判定する）の時に、病人を強く押す「**検査**」をし、その捕虜がぐらつかなければ仕事に出し、ぐらつけば無礼だと言って殴った。所長や職員の虐待が原因で死亡した捕虜もいる。

赤十字小包はほとんど日本人職員が私物化して捕虜には行き渡らず、クリスマスと天皇誕生日に

1人半個ずつ支給されたただけだったが、それも捕虜が仕事に出ている間に軍属たちがみな持って行ってしまったという。同じ横浜の次に述べる横浜球場収容所の捕虜たちが、計3回1人1個ずつ支給されたのとは大きな違いである。

この写真にあるテーブルの上に並べられたご馳走はプロパガンダ用で、撮影が済むと片づけられてしまったという。

残虐で無慈悲な職員が多い中で、捕虜たちを陰で支えてくれた日本人もいる。

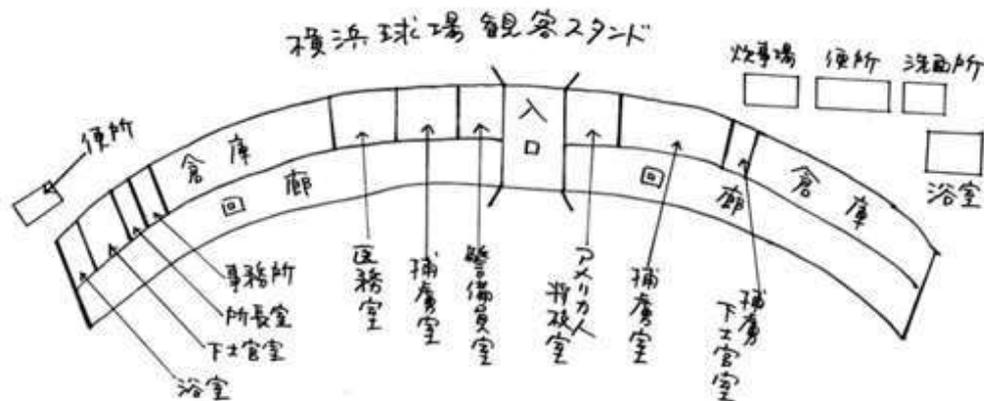
尋問官だったエール大学卒の若い将校は、暗号解読部長だった米軍のグレイディ中尉が口を割らなくても決して手荒なことはしなかった。グレイディ中尉は、戦後、検察側証人として出廷し、多数の日本人を有罪（死刑を含む）に導いた人だが、この“エール将校”については、「彼は私にとって、道理をわきまえた日本の代表であり、戦争への道を望まぬ、そして自らの残虐性に衝撃を受けた日本の代表であった」と書いている。

また、オキモトという50歳前後の通訳で、彼はニューヨークで36年間暮らし、日米開戦後、日系人の収容所に入れられたが、1942年夏に交換船で帰国した。彼は他の職員の目を盗んでは捕虜たちにタバコや食べ物や新聞を持ってきてくれ、収容所の改善にも努めてくれたという。

田村佳子さん：横浜の人には馴染みの多い桜木町のランドマークにあるドックヤードガーデン。今はコンサートなどが開かれる屋外イベントスペースですが、往時のドライドック、唯一保存されたもの。周辺には当時いくつかのドックがあり、それぞれで船を建造・修理しており、捕虜を使役しました。

再訪したアメリカ人元捕虜は当時の過酷な環境下での労働を思い出し、感慨に耽っていました。

(2) 東京第3分所（横浜球場） 所長は僧侶出身、日本一居心地がよかった



横浜球場の観客スタンド下の部屋が宿舎や事務室として使われた。居住環境は割に良かったという。労働時間は1日8時間（捕虜の証言では10時間）で、休日は月に2回。仕事は楽ではなかったし、食糧や医薬品も乏しく、日本人による殴打もいくつかあったが、他の収容所に比べれば捕虜の扱いは良く、赤十字救恤品は公平に分配され、楽器や本などの娯楽品も与えられた。

戦後この収容所の調査では、「相対的に言うと、この収容所は公正であった」と記している。フィリピンから来たアメリカ兵、シリートも「横浜球場収容所は多分日本一だったろう」と語っ



横浜球場収容所の捕虜たち (W. Shilito 提供)

ている。シリトはのちに第18派遣所（横浜耐火煉瓦）を経て、新潟の第5分所に移送されたが、「横浜と新潟を比べると、さながら天国と地獄だった」とも述べている。

戦犯：「天国」「日本一」と言われたこの収容所でも、通訳上等兵が捕虜虐待の罪を問われて重労働1年の刑を受けている。また、所長の林純勝中尉は、第1分所埠頭支所（のちに第2分所）時代の罪で、重労働3年の判決を受けたが、その後1年に減刑された。彼の裁判の日本側弁護人は、のちに横浜市長、社会党委員長を務めた飛鳥田一男氏であった。

酒井：近隣の者が、トラックに捕虜たちが乗せられて、どこかへ行くのを見たことがある、と最近聞いた。

田村佳子さん：横浜球場については、捕虜と関わったという男性に昔お会いし、捕虜たちはスタジアム下で寝起きし、死者が出ると大八車に乗せて山の上に捕虜と一緒に連れて行ったものだ、と聞きました。また当時の女学生からは、横浜の学校に通っているとき、市電から捕虜が隊列を組んで歩かされているのを見たことがある、とお聞きました。

(3) 東京第18派遣所（横浜耐火煉瓦） 楽器が購入され自由時間に演奏して楽しむことも

捕虜たちは煉瓦の製造作業に従事した。煉瓦は主に船のボイラー用であった。根岸の山に木を伐採に行くこともあり、その姿が近隣の人々に目撃されている。労働時間は朝8時から夕方5時まで。賃金は1日20銭で、会社が軍にお金を渡し、軍が捕虜に支払った。

日々の生活：収容所が会社に依頼して、ギターやバイオリンなどの楽器を購入して貰い、捕虜たちは自由時間に演奏して楽しんだ。1944年のクリスマスには演芸会を催し、仮装行列も登場して大いに盛り上がった。

戦後：戦後まもなく、何人かの捕虜が煉瓦工場を訪れ、世話になったお礼としてタバコやチョコレートなどを置いていったという。（下記「やぶにらみ磯子郷土誌」を参照。）



1944年のクリスマス。前列の日本人が飯田曹長。大沢秀人氏提供

(4) 東京第19派遣所（横浜船舶荷役） 日本人と同じ弁当を支給、ミナトのおやじもいた

2棟の捕虜宿舎と附属棟で構成され、周囲は上部に2重のバラ線を張った2.4mの塀に囲まれていた。敷地内に7つの防空壕があった。

横浜船舶荷役の取締役だった松本健太郎氏によれば、捕虜には日本人労働者と全く同じ弁当を出したので、捕虜たちは港で働くことを歓迎し、横浜に来てから体重が増えたと喜んでいたという。捕虜には甘味品やタバコの特配が禁じられていた

が、同社の作業本部長として横浜港の全船荷役を指揮していた「ミナトのおやじ」こと藤木幸太郎氏は、看守や軍人の隙をみて、彼らのポケットに飴玉やタバコをねじり込んでやると、彼らは顔中をくしゃくしゃにして喜びの表情をみせ、なかにはうっすら涙さえ浮かべ、何度も頭を下げる者もいたという。

(5) 東京第14分所（東芝鶴見工場） 虐待死が横行も、女学生の弾くピアノに癒された

捕虜とピアノ：2010年7月、筆者（笹本妙子氏）は総持寺の近くに住む越田容子さん（1929年生）と知り合った。

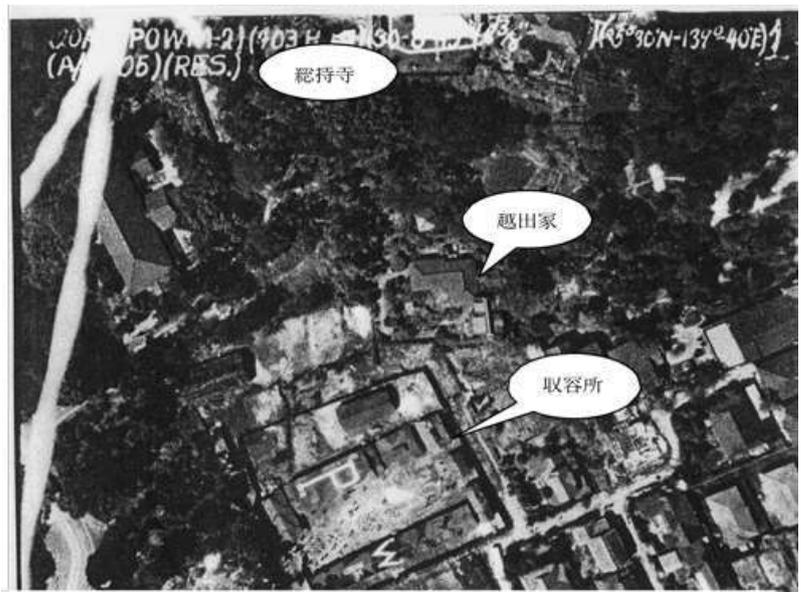
越田家はかつて東京の池上に住んでいたが、1945年3月10日の東京大空襲の後、強制疎開のため鶴見に引っ越してきた。この辺りも空襲が激しかったが、16歳の女学生だった容子さんは音楽学校進学を目指して、毎日ピアノの練習に励んでいた。越田家は高台にあり、周辺に人家が少なかったためか、咎める人もいなかった。

ある日、隣の空き地に捕虜収容所ができるという噂が立ち、近所の人が「お宅は若いお嬢さんがいるのだし、どこかに引っ越さなくて大丈夫？」と心配してくれたが、他に行くあてもなかった。やがて建物が2棟建ち、7月末に捕虜たちがやってきた。窓から収容所の様子がよく見えた。みな痩せてみずぼらしい身なりをし、もう働く所もないのか、外に出て行く様子もなかったが、時々所内からピシピシとムチで叩く音や怒鳴り声が聞こえてきた。越田家では小さな畑にナスやトマト、キュウリ、南瓜などを作っていたが、朝になるとそれらの実がきれいにもぎ取られていた。収容所の塀に穴が空いており、捕虜たちの仕業と思われたが、母は「お腹が空いているのだろうから」と見て見ぬふりをした。総持寺の裏山からへびを捕ってくる捕虜もいたし、畑仕事をしている越田家の使用人にタバコをねだってくる捕虜もいたが、概しておとなしく、穏やかな人が多かった。

容子さんはいつも午後2時頃にピアノを弾いていた。夏なので窓を開け放していると、ある日1人の捕虜が屋根の上で彼女のピアノに耳を傾けているのに気がついた。翌日は2人になり、次に3人になり、日ごとにその数が増えていった。

8月15日に終戦を迎え、しばらくすると米軍機から救援物資がパラシュートで投下されるようになった。収容所の敷地内だけでなく、周辺にも飛び散り、近隣の人々が越田家の庭先まで拾いに来たこともあった。

ある夜、玄関のベルが鳴り、父が門まで出ていくと、1人の捕虜が「これをお嬢さんに」と両手一杯のプレゼントを差し出した。チョコレートや缶詰や石鹸など、当時の日本では手に入らぬ品々ばかり



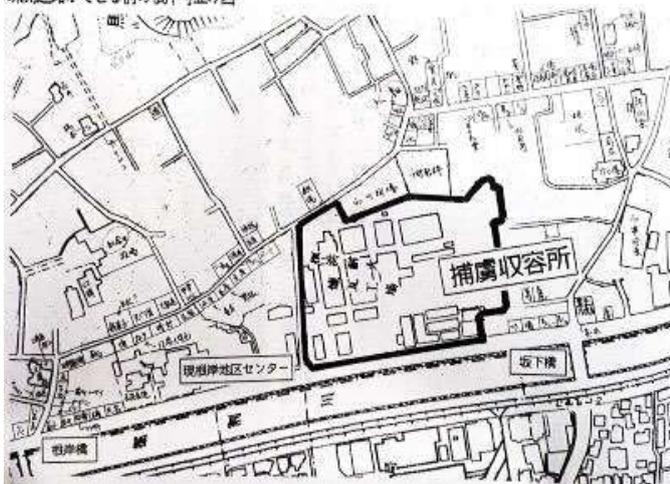
総持寺前の収容所と越田家。1945年8月30日撮影。

りであった。8月30日、今度は20人ばかりの捕虜が砂糖袋やパラシュートの布に包んだ物資を肩に担いでぞろぞろと越田家にやってきた。今日、お国に帰るのだという。驚いた両親は彼らを迎え間に迎え入れ、あふれた人たちはベランダに腰を下ろした。お茶を出す容子さんに彼らは言った——「ピアノをありがとう。あの音に慰められました」。容子さんと母は家にありったけの人形を集めて、彼ら1人1人にプレゼントした。やがて、彼らは収容所の前に横付けされたバスに乗り、窓から大きく手を振りながら去っていった。(以下省略)

5. 堀割川のほとりに捕虜収容所があった 一所长は戦後 軍事裁判で有罪一

「やぶにらみ磯子郷土誌」葛城峻、磯子区郷土研究ネットワーク、2015年、より抜粋・転載。

疎開道路ができる前の根岸町並み図



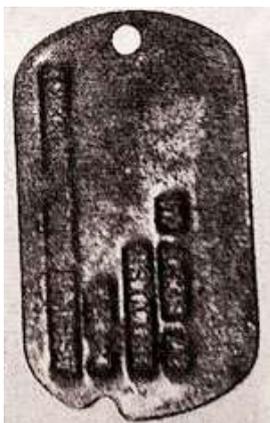
旧地番の「西根岸馬場町八」ですから堀割川の坂下橋と根岸橋の間の山側、今はホンダや日産の乗用車ディーラーが並ぶあたりに、明治初年キリンビールのびん工場ができ、34年に跡地に地元の森卓三氏が「横浜耐火煉瓦」の工場を創設しました。船舶ディーゼル機関やガス工場の発生炉、製鉄所の溶鉱炉用の特殊な煉瓦がつけられました。昭和19年5月1日から20年6月4日までの1年間、この地に捕虜収容所(戦時中の公用語で「俘虜収容所」)が置かれ、連合軍の捕虜86名がここから市内各地の軍需工場・施設に運ばれ作業

をさせられていました。近くの話では空襲のときなど捕虜たちが袋をかっいで裏山に避難して行くのをよく見かけたそうです。

東京都旧大森区入新井の、今は平和島競艇場入口付近にあった東京俘虜収容所本所の管轄下に、終戦時点で、神奈川、茨城、栃木、長野、新潟の諸県に16の「分所」と3つの「派遣所」が置かれていました。労働力不足を補うため京浜工業地帯の中心神奈川県には16もの分所・派遣所がありました。

昭和17年9月に現在の横浜スタジアムに「東京俘虜収容所第三分所」が置かれ、その管轄下に日清精油、横浜沖仲士会社、大阪造船所、東芝鶴見工場、三菱ドック、日本鋼管鶴見造船所、同川崎工場、同扇町工場、同浅野ドック、味の素川崎工場、日清製粉鶴見航空機工場などに「派遣所」がありました。根岸の耐火煉瓦工場はその1つ「第十八派遣所」で、朝晩いかめしい剣付小銃を構えた兵士

に監視されてトラックで出入りしていました。捕虜のおかげで仕事はかどったとか「捕虜に負けてなるものか!」と頑張ったとか、「戦争に負けるとこうなる、どうしても勝たねば!」とか捕虜の効果はいろいろでした。ただ当時の日本人は「戦陣訓」で「生キテ虜囚ノ辱メヲ受ケズ」と教育され、捕虜になる前には自決するのが当然とされていたから、彼らが一様に陽気なのは奇妙な感じでした。日本人女性を見るとトラックの上から口笛を吹いたりして自分の置かれた立場を一向に苦にしません。軍国少年たちは「なんちゅうアメ公野郎らだ!」と軽蔑していました。東京では時代の風を読めない上流家庭の奥



俘虜識別票

サマが労働の捕虜を見て「お可哀そうに・・・」とつぶやいたとかで憲兵に大分油をしぼられた話も聞きました。戦後にアメリカ映画の「第十七捕虜収容所」や「大脱走」などで捕虜というものの考えが日本と全くちがうことを知り、彼らが恥ずかし気もなく口笛を吹いていたのを「なるほど」と思ったものです。

20年6月4日に86名中81名は新潟の第五分所に、5名は本所に移動しますが、戦犯裁判が始まるや所長のK少尉は空襲時に捕虜を避難させずに働かせ死者を出したことや、赤十字品の横流し、部下の兵士の暴力行為の黙認などの理由で逮捕され、横浜の軍事法廷で重労働9年の判決を受けました。初期の裁判は勝者側の報復意識が濃厚で判決も死刑・無期などが多く過酷なものでした。横浜で死刑判決を受け処刑された人数は51名にのぼりますが、そのうち31名が各地の捕虜収容所関係者でした。(後半省略)

6. 私の新聞投稿掲載記事から

(1) 「稲木所長の孫娘に感銘」 岩手日報 【日報論壇】 2021.8.18

2021年8月5日のNHK「ラジオ深夜便」明日へのことばで、釜石捕虜収容所の所長をされた稲木誠さんの孫でジャーナリストの小暮聡子さんの「戦犯となった祖父の思い出」と題する話を聞いて感銘を受けた。

稲木所長はジュネーブ条約に基づく博愛精神で捕虜に接していたのに、横浜裁判でBC級戦犯宣告を受け、5年半も巣鴨プリズンで煩悶の日々を送り、体も壊したと言う。ところが、戦後30年たった時に、捕虜収容所に収容されていたオランダ人の元捕虜だったフックさんから釜石市長に、捕虜に対する取り扱いも良く、市民にも親切にしてくださいという感謝の手紙が届いたという。

稲木所長は理不尽な戦犯とされた巣鴨プリズンでの獄中生活に耐えた後で、時事通信社に入社し、ホノルルでの特派員などを経験された。それ以来、稲木所長とフックさんとの間で12年間にわたって手紙の交換がされたと言う。

私が感銘を受けたのが、米国による一方的な裁判で祖父が戦犯の汚名をきせられたという戦争のむごさを訴え、祖父の名誉を挽回させてあげたいという孫娘小暮さんの強い心意気だった。そのために国会図書館で裁判記録を全部調べて確かめ、それでも一方的ではいけないと思い、捕虜だった側の情報も直接確かめたということだった。祖父と手紙の交換をしたフックさんの息子らとの交流を持ったという。暴力は一度もなく、親切な扱いだったと言われ、わだかまりがなくなり、今も交流が続いていると聞いて感動し、安堵した。

3年前、私は兄が飢えと戦いながら戦死したニューギニアのジャングルをたどって現地慰霊し、むごい戦争を二度と繰り返さないことを孫子に伝えていくことを兄と約束してきた。小暮さんの、祖父の体験を通して戦争のむごさを次世代に伝えていきたいという信念を聞いて、私も不戦の思いを新たに、平和祈念の思いを強くした次第である。

(2) 「伝え続けたい不戦の思い」 岩手日報【日報論壇】2022.2.4

私は昨年、元釜石捕虜収容所長だった稲城誠氏が博愛精神で捕虜を処遇したのに戦犯の汚名をきせられた不条理を究明し、祖父の名誉を回復させた孫娘の小暮聡子氏に感銘したことを報告した。

その後で、さらにその思いを強くした奇縁があった。私の住む横浜市の保土ヶ谷に英連邦戦死者墓地が

ある。ここには太平洋戦争で捕虜になり、日本に送られて炭鉱などで過酷な強制労働を強いられた約 1700 人の戦死者が眠っている。その墓地の近くに住む田村佳子氏が英国などに住む元捕虜の遺族にこの墓地を案内していることを NHK のラジオで聞いた。私はその放送を聞いて日本に 130 ヶ所もの捕虜収容所があることを初めて知った。釜石の収容所もその一つだった。

田村氏は、毎年 11 月に英国大使も出席してこの墓地で行われる英連邦の慰霊祭に参加されているが、その功績が評価され、エリザベス女王から叙勲を受けている。

ちなみに私の兄はニューギニアで戦死しているが、田村氏の父親がニューギニアからの生還者であったことなどから、奇縁をいただいているいろいろなことを教えていただいている。その一つが今年の Newsweek 誌 12 月 14 日と 21 日号に掲載された「櫻井翔と戦争 戦没した家族の記憶」の記事だった。

それは「嵐」の櫻井氏が、祖父の兄（大伯父）が東大の学生から海軍経理学校に入学して海軍主計少佐として南シナ海で戦死した経緯を探る貴重な記録だった。彼が友達からなぜそんなに戦争にこだわるのかと聞かれた時に、「私は遺族だから」と言った言葉が、25 歳の兄を戦死させた私にも理解できた。

さらにこの記事を読んで感銘を受けたことがあった。それはこの記事の最後に「遺族として寄稿した筆者・櫻井翔に聞く」としてインタビュー記事が載っていたが、そのインタビューは何と稲木所長の孫娘の小暮氏だった。私はそれを知って奇縁を感じるとともに、櫻井氏が最後に言われた「たゆまずに調べ、書き残すことが祖父や大伯父の鎮魂になる」と言われた言葉に、小暮氏も全く同じ思いをされたのではないかと想像し、私も不戦の思いを新たにしたことであった。

私は近くの大学の生涯学習教室のゼミで遅ればせながら英国史を勉強しているが、今回学んだ、英連邦捕虜のことを忘れずに、平和活動を続ける人たちの事を報告し、不戦の思いを伝えていきたいと思っている。

(3) 「戦争での死者を忘れない」 神奈川新聞 2022. 2. 10

横浜市保土ヶ谷区にある英連邦戦死者墓地に花を供え、旧敵国の戦死者を悼む田村佳子さんのこと昨年秋のラジオ番組で知り、感銘を受けた。田村さんは横浜に住む英語塾講師で、「POW（戦争捕虜）研究会」の活動をしている。会では太平洋戦争で捕虜になり日本の炭鉱などで働かされて亡くなった連合軍兵士の実態を調べ、その記録の収集に努めている。遺族はその資料を基に亡くなった地を訪ね、英連邦戦死者墓地に参拝するのだという。

私の兄は、先の大戦でニューギニアで戦死。3 年前にその現地慰霊に行ってきた。暑さの中で、飢えとも戦いながら死んでいったらう兄を思った。その状況は、日本で過酷な強制労働を強いられて死んでいった各国の捕虜の姿と重なる。

私も英連邦墓地を何度か訪ねたが、戦争で亡くなった人たちの霊を慰めるのは敵も味方もない。戦争で若者たちを犠牲にすることは繰り返してはならない。

平和をつなぐために、戦争での死者を忘れない活動を大切にしたい。

おわりに

ラジオ深夜便で偶々英連邦戦死者墓地の話聞いてしまったために、捕虜や墓地の暗い話になってしまって申し訳ありません。

ただニューギニアのジャングルの中で、飢えと戦いながら死んでいった兄を現地で慰霊して来た私は何故か他人事ではないように感じたもので、お許しをいただきたいと思います。

最初はあまり知識もなく何となく訪れた英連邦戦死者墓地に、実はこれほど多くの、捕虜となり死んでいった若い兵士たちが葬られている場であることを、知り得ることになりました。人として生きていくうえで広く深い示唆に富むこの真実を、一人でも多くの方に知っていただき、共有することができるならと横浜歴史さろんの記事にさせていただくことになりました。

兄の現地慰霊に行って、不戦の思いを伝えることを誓いました。これにて少しは約束を果たせるのではないかと思います。

英連邦戦死者墓地から平和を学び、固く不戦の誓いを立て、広く伝えていきたいと思います。

(以下は、横浜歴史さろんのサイトにおいては、右コラム（右側の縦欄）に配置・掲載された補足説明です。)

特集 英連邦戦死者墓地から平和を学ぶ

—補 足—

英連邦戦死者墓地を支えながら、平和を祈念する人たち

1. 永瀬隆氏 (1915~2011)

a. **略歴**：青山学院大学を卒業して、軍属として派遣されたのが、「戦場にかける橋」のモデルとなった、ビルマ（ミャンマー）、タイ間に泰緬鉄道を建設する現場だった。インド攻略のため400キロに及ぶ鉄道を建設するために、日本軍はイギリス兵の捕虜などを動員して強制労働をさせた。

英語の達人な彼は、憲兵隊の通訳としての任務を与えられた。自分では直接捕虜を指示する立場にはなかったが、通訳をしながら、捕虜の過酷な労働を目の当たりにして、戦争の惨さを実体験した。（体験談は詳しく書かれている）

b. 連合国の墓地調査に参加

終戦直後、連合国側が泰緬（たいめん）鉄道建設に絡んで現地で亡くなった捕虜の実態を調査するのに、当時の現地の状況を知っていて、通訳も出来る者として、日本側の証人として招集され、参加した。

捕虜を虐待した側で、しかも敗戦国の旧軍人として参加させられるのは、彼が「辛い3週間だった」と述懐するように、彼の心に忘れられない感情を残したのに違いないと思う。それが、後々彼に英連邦戦没者墓地で、敵方だった捕虜の英霊を追悼する活動を続けさせたのではないかなと思う。

c. 追悼礼拝に駆り立てたもの

彼に英連邦戦死者慰霊追悼に駆り立てたのは、前記の通り泰緬鉄道で体験した敵方捕虜の悲惨な運命を慰めてやりたいと言う一念であろうが、関連して私の感じたいいくつかを採り上げて見たい。

1. カウラ事件の教訓

カウラ事件とは、終戦の1年前の1944年の8月、オーストラリアのニューサウスウェールズ州カウラ市にあった日本人の捕虜収容所で1000名の捕虜が脱走し、231名が死亡した事件。学んだのはこれに対するカウラ市民の人道的対応だった。

脱走するのは生きようとして危険を冒すものだが、日本兵は「生きて虜囚の辱めを受けず」と、捕虜になってまで国に尽くして死を選んだと、カウラ市民は高く評価した。カウラ市民はオーストラリア軍の兵士の墓に隣接して日本人の墓地をしつらえ、別に日本式公園と日本文化会館を作り、墓地に繋がる道路に桜並木を植えた。

1994年、カウラ市が、犠牲から50年になる年に、敵対国の捕虜の死を悼むために現地で式典を開いて

くれた。日本からは生き残り兵や遺族、市民グループなど41人の慰霊団が訪問したが、永瀬氏がその団長を務めた。

2. 元捕虜との出会いの奇縁

戦後連合国の墓地委員会が泰緬鉄道の現地で捕虜の調査をした時に永瀬氏が参加したことを述べた。実は、その時に連合国側の委員として参加したのが、オーストラリア人のデビッド・バレットさんだった。バレットさんは、まさにあの泰緬鉄道建設の時に捕虜として働かせられた一人だったが、同じ調査に携わり、戦時中の立場を超えて二人の友情が深まって、交流が続いている。

因みに、バレットさんはその後、1998年に、日本の英連邦戦死者墓地を訪れ、献花している。

3. もう一人の捕虜との出会い

永瀬氏は泰緬鉄道の記憶と記録を正確に伝えようと「虎と十字架」(CROSSES AND TIGERS)を英書出版した。その中で、泰緬鉄道の時にスパイ容疑で日本軍に拷問された英国軍通信少尉のロマック氏のことを書いた。この本を読んだ英国の夫人から「夫はまだあなたを許していない」との厳しい手紙が届いた。

永瀬氏は誠心誠意を尽くした謝罪の手紙を送ったら「二人とも涙を流した」との返信があった後、互いの気持ちを整理するのに100通の手紙を交換した。そのあと、タイのカンチャナブリーで二人が再会した時に、ロマック氏が「昔、あなたが別れる時に言ってくれた「KEEP YOUR CHIN UP」(元気を出せ)と言ってくれた言葉が忘れられない。私たちは友達以上です」と言って貰えた。心に十字架を背負った50年後、二人は和解出来、国際電話で近況をやり取りする仲になり、最近はこの言葉で、互いに老齢を励まし合っていると言う。

因みに、ロマック氏は戦後グラスゴー大学で教職を歴任しながらも、拷問の精神的な後遺症に悩まされ続けていたと言われる。

d. 感銘を受ける永瀬氏の残した功績

1. 様々な体験と出会いから敵国の捕虜の墓地である英連邦戦死者墓地での慰霊追悼式を立ち上げたことに先ずは敬意を表したい。戦後50年を期に始められた追悼礼拝式は、氏の他界された後も続けられて来て、コロナ禍の今年も厳粛に行われた。
2. 氏はタイに日本兵の鎮魂のためのバゴダ(念仏堂)を建て、また、ラジオでの氏の戦争体験を聞いた人からの寄付金によって、日本兵、連合軍捕虜、アジア人労働者の慰霊のために現地に平和祈念堂も建てられている。
3. タイの子供や看護学院生200人に奨学金を支給。
4. タイへの慰霊の旅は100回を超えた。

以上のような永瀬氏の献身的な貢献、特に、タイの英連邦墓地への慰霊などに対し、駐日英国大使から特別感謝状が贈られた。

2. 恵子・ホームズ氏 OBE勲章(英王室第4級勲功賞)を授与された女性

古い資料になるが、「現代思想」2000年11月号に「捕虜は何故和解に傾けないか」と題する中尾和代氏(ポストコロニアルスタディーズ)の論稿が掲載されている。当時の捕虜問題のことが詳しく書かれていて、その中にイギリスで「和解礼拝」などを通して捕虜たちとの和解活動を進めたことにより女王からOBE勲章を授与された恵子・ホームズ氏のことが多くを占めていて感銘を受けた。恵子氏のことは後述するとして、当時の捕虜問題に関する中尾氏の論評の概要に触れて見たい。

a. 中尾氏の論説の中から

- 最初に出てくるのが1998年に天皇陛下がイギリス訪問した時に、元捕虜たちが血染めを連想させる赤い手袋を付け、日の丸の旗を焼いて抗議したということだった。その時に現場にいた中尾氏がその一人に話を聞きたいと話しかけたが、「俺はビルマで戦ったが、捕虜だった友人が沢山亡くなった。日本人は絶対に許せない。日本人のあなたと話すことはない」と言って立ち去られてしまった。彼女は日ごろから抑え込んでいた嘆きと理不尽さがこみあげて来て、その場で号泣してしまった。翌日の新聞に「泣いて許しを乞う日本人観光客」と書かれてしまった彼女の心境は理解できる。ただ、一方で「日本人はこれまで一番勇敢な敵だった」と感嘆や賛美の念を持つ人もいる。戦争当時は無機質な敵とみなしていた相手(日本兵)の人間性を戦後改めて確認し、日本人の死を悼み、自らの心の痛みを解きたいと言う英国軍人も存在する。
- よく、捕虜問題の賠償についてはサンフランシスコ条約で解決済みと聞く。このことについて次のように書かれているので参考までに引用したい「講和条約で定められた賠償規定により、日本は国際赤十字に45億円、海外の凍結資産を含めて59億円を連合軍側の14か国に支払った。英国の割り当て分は約163ポンドで、元捕虜に76.5ポンド、民間抑留者に48.5ポンドが支払われた。当時の為替レートでは、額の多寡について日英間で感覚のずれが大きく存在した。
- 1995年、村山首相がお詫びをした村山談話を発表した当時のことを振り返って見たい。1995年のVJデー(Victory Over Japan)を中心に、英国のメディア、元捕虜団体は、日本側の謝罪を要請する激しい動きに出た。一方で、英国内では別の動きもあった。＜英米は人種偏見に基づく核兵器使用を自ら反省すべきであり、日本に対する一方的な謝罪要求は的外れである。英国側の帝国主義の反省こそ必要＞とする新マルクス主義の団体がキャンペーンを開催した。軍国主義反対運動を行うパーミンガム大学生たちが参加した。原爆反対、反省のための50周年記念行事が各地で行われたが、捕虜の反発を招いた。元捕虜の多いエジンバラでは、原爆反対派の民間団体による原爆被害展示に対して元捕虜らが異議を申し立てた。

b. OBE勲章を授与された恵子・ホームズ氏について

- 1991年から英国在住の日本女性、恵子・ホームズ氏は、故郷の三重県入鹿村に残る捕虜の墓へ元捕虜を訪問させ、日本人との交流を発想。夫(イギリス人)を飛行機事故で失った際、「神が私に共同の業をしよう」と呼びかけたと言う彼女は「捕虜の魂の救いと心の癒し」を目指し、日本人や企業の寄付を募り、自らも日本文化の会を開いて資金を集め、捕虜たちの日本訪問を実現し始めた。英国に残る敵意を、相互理解に移行させる試みを積極的に行った。日本軍人の受けた教育について理解するセミナーを開催したり、個人資金でビルマを訪問、日本側の軍人と相互交流し、互いの墓地で慰霊祭を行うなど、戦地で顔を合わせた軍人にしか出来ない一種の共感を育んだ。
- 彼女の活動に大使館は村山資金によって援助を始めた。沼田公使は夏に恵子氏が開催する＜和解礼拝＞に参加し、メッセージを行うなど積極的にアピールした。大使館でも頻りにパーティーが開かれ、捕虜たちが招待された。また、捕虜の孫を日本に送る活動にも、大使館の援助が与えられた。
- 1997年に天皇の訪英が決定してからは、急ピッチで和解達成への準備が進められた。98年には橋本首相のお詫びが新聞に掲載された。BCFGを中心とする日英元軍人による戦地訪問が3月に企画され、4月には恵子氏に女王がOBE勲章(Order of the British Empire)を授与、「和解」は一種の合言葉になった。
- 「和解への道」は「天皇訪問への道」でもあった。その後も、恵子氏が進める、捕虜日本訪問は年2回行われている。また、英国政府も出資して、英国軍人と日本軍人の慰霊祭が行われた。
- 1997年12月、恵子氏も招待されたロンドンの大使館で行われた天皇誕生日の祝賀会の席で、元捕虜のジェリー・デイさんが林大使と互いにファーストネームで呼び合った。(その時の様子が「世界」に小菅信子氏の論文で、日本と捕虜の和解の感動的な一場面として紹介された)

- 中尾氏が「和解とジェンダー」として次のようなことを書かれている。私には良く分からない点もあるが、そのまま引用させていただきます。

「ドイツと英国の和解の象徴であるコヴェントリー大聖堂に、日本と英国の和解を象徴する〈和解の像〉が建設されたのは 1995 年のことだ。一組の男女がひざまずいて合い抱いている。争いの後に、ともに悔いて泣き崩れているような像。これは感動的な像ではあるが、同時に〈和解〉を男女のジェンダーで象徴するという方法を示す。日本側の和解活動の特徴は、日本女性が旗頭・シンボルとして中心に据えられ、ジェンダー・ポリティクスを誤用する形で展開したことである。黒いおかつぱ頭、着物姿の市松人形のごとき恵子・ホームズ氏は大使館にとって和解のシンボルとなった。そもそも日本兵の残虐非道さのイメージが強く、日本男性に恐怖を覚えるトラウマに付きまといられる捕虜たちにとって、女性が先導してくれるということは安心感を生み出した。また、彼女自身がクリスチャンであり、亡くなった夫が英国人であることは、彼女が西洋の価値観を受容したいという安心感を与える。亡父との間の子供の存在も日英の融和のシンボルに似つかわしい。」

- 最後に、中尾氏が恵子氏の活動に感動しながらも基督教の枠組みにはまるとして一つの問題点を指摘している。（基督教に門外漢の私も正直言ってそんな感想を持ったが、それでも彼女の和解に向けた平和への真摯な取り組みにエールを送りたいのである。）

「個人の心の癒しの大切さに着目した恵子氏の洞察力、憎悪に晒されながら活動を続ける氏の信仰心は感動を生む。日本への憎悪を心から抱き、許せないと思っている人々の表情と眼差しを一度でもまともに経験し、その拒絶の凄まじさを体験した者ならば、彼女の活動が壮絶な努力によるものであることを理解する。彼女を通して捕虜問題に触れた者も数多い。さらに、日本の普通の人と接し、歓迎されることで、日本人恐怖や憎悪から自由にされる人々がいるのも確かである。だが、その〈感動の物語〉には、語られない影のようなものが付きまとう。第一にそれは、基督教の枠組みによる和解活動である、という点にある。」、と。

3. 英国捕虜との和解活動のパイオニアとなった小菅信子氏

英連邦戦死者墓地を支えながら平和活動に取り組む人たちの偉業を讃えようと思った時に、それならば、その活動を進めるパイオニアとなった小菅信子氏の書いた「ポピーと桜」を読むようにイギリスの歴史に詳しい仲間から教えていただいた。

この本を読んで、小菅氏が強い反日感情を拭い去れない英国捕虜との和解について苦しみながら如何に献身的に活動してきたかが分かって感銘を受けた。私は前段のホームズ恵子氏の業績を中尾和代氏が「現代思想」の中で評価していると報告したが、実はその中で中尾氏が小菅信子氏を同じように高く評価していることを「ポピーと桜」を読むことによって確かめることが出来た。

ホームズ恵子氏は 1991 年から英国で和解活動を始めたが、小菅信子氏はその数年後の 1996 年から英国で活動を始めた。小菅氏はケンブリッジ大学国際研究センター客員研究員としてケンブリッジに住んだが、その場所はケンブリッジ聯隊出身の退役軍人捕虜が一番多いところで、和解活動が一番難しいところだったが、小菅氏は石ころを投げつけられるのを覚悟しながらたゆまずに活動を進めた。

私の感じた主な活動だけを採り上げて見ても次のような輝かしい実績がある。

a. ケンブリッジ市営墓地での献花

小菅氏は縁あって、1996 年 11 月のケンブリッジ市営墓地での「記憶の日」（ポピーの日）に、和服姿で跪いてポピーの花束を献花して慰霊した。この姿を見た軍人捕虜だった一人の老人が駆け寄り、「日本人とは一

生口をきかないと神に誓って来たが」と言いながら号泣した。二人は思わずに抱き合って涙を流した。

このことがケンブリッジ・イブニング・ニュースの1面に「友情の涙 TEARS OF FRIENDSHIP——礼拝式で繰り広げられた感動的シーン」として採り上げられた。この新聞記事の反響は大きく、「癒しの天使」と言われた小菅氏の和解活動に繋がることになった。

b. 「ポピーと桜クラブ」の立ち上げ

小菅氏は「和解を押し付けるのは英国風でない、まずは日本と再会できる場を作ることから始めること」と言う、奇縁を得られた元英国軍人の示唆を受けて「ポピーと桜クラブ」を立ち上げた。文化は中立と言う観点から、まずは日本文化を知って貰うことから始めようと、ケンブリッジの英国退役軍人会のホールを借りてレセプションを始めた。和菓子(干菓子)を買って行って茶道を、また、昔取った杵柄でお母さんから借りた着物や帯を持って行って日本舞踊も披露した。

因みに、小菅氏はこの会を開くのに多くの日本人に世話になったと言っているが、その中に当時ロンドン大学で在外研修をしていた関東学院大学の林博史先生にお世話になったことが書いてあった。先生の紹介で色々な方との交流が出来て有難かったという感謝の言葉もあった。

c. 「日英捕虜会議」の立ち上げ

連合軍捕虜処遇問題の歴史研究を日英で協調して進めて行くことが歴史研究家小菅氏の念願であった。日英で10人ずつの専門家をケンブリッジに招き、元捕虜の人にも参加していただいて、研究者の報告をして貰い、最終的には日英の論文集を出版し、記録に留めることである。その人選にも苦労されたが、先立つ資金の捻出にも苦労された。種々手を回して大使館からの資金援助も得られて開催にこぎ着けた。

(この資金援助については、援助を受けることによって、ひもが付いて会議の方向が制約されると言う見方も一部にあるが、私はそれには賛同できない。元々は国家の政策で始めた戦争の結果生じた捕虜問題でこじれている問題を国として解明し、解決していくのは国の責任であって、個人の問題ではない筈である。私は国でやるべきことを時には涙を流しながら、時には石を投げかけられるのを覚悟しながら進めた小菅氏の活動はまさにパイオニアとして崇められてしかるべきと思う。)

d. ウェストミンスター寺院での献花

前年(1996年)のケンブリッジ市営墓地での献花が大きな反響を呼び、翌年にはロンドンのウェストミンスター寺院での公式な追悼礼拝式に小菅氏が招待されて出席し、やはり和服姿で無名戦士の墓の前で献花した。戦死者追悼の総本山であり、英国の靖国神社のような場所で、戦後日本の民間人が献花するのは初めてだった。

なおこの追悼式には大使館の沼田公使も参加され、また国際研究センターの院生古屋はるみさんも和服姿で参加して協力するとともに、小菅氏が和解活動を進める証人にもなってくれた。

このウェストミンスター寺院での献花が契機となって、そのあとケンブリッジで2回目の「ポピーと桜」クラブが開かれ、ケンブリッジのダフネ・ローバー市長や藤井大使夫妻も参加して和解活動が進められた。

e. ケンブリッジ訪日団が靖国神社、英連邦戦死者墓地を訪問

このような献身的な和解活動が功を奏し、1998年3月王立英国退役軍人会ケンブリッジ訪日団が靖国神社と英連邦戦死者墓地の訪問が実現した。それは同年5月の天皇の訪英に繋がり、まさにポピーと桜が一つになり、積み重なった和解活動が実を結んだと言える。なお、その直後にあった天皇の訪英はこのような和解活

動の成果によるものと思われるが、その時に元英軍捕虜による日の丸の旗焼き討ち事件があり、和解活動の難しさの一面も見せつけられた。ただ、その焼き討ち事件の後日談として小菅氏が多くのページを使って「ポピーと桜」の中で、恵子ホームズ氏が焼き討ち事件を起こしたカブランさんにアプローチして和解活動を進め、日本人と再会する決意を固めさせ、日本訪問をさせるまでになった功績を讃えている。

因みに、この和解活動により恵子ホームズ氏はOBE（英王室第4級勲功賞）の叙勲の栄に浴し、ウインザ一城に招待され、女王自らの手で勲章を手渡すという破格の待遇を受けた。その席には彼女を信頼する元捕虜の人たちも招待された。（前出）

一方で、彼女の和解活動に対しては、誤解も批判の声もあると言う。ただ、彼女はどんな批判も試練だから受け入れるとし、反論する時間があつたらその分和解活動を進めたいと言っていることに中尾氏が最大の賛辞を贈っている。

私は恵子ホームズ氏の業績については前段でその一部を報告したが、中尾氏が贈る賛辞を読んで改めて恵子ホームズ氏の和解活動に深い敬意を表するのである。同時に、厳しい批判にも耐えて和解活動に献身的に取り組む小菅信子氏にも私は最大の賛辞を贈りたいのである。

英連邦戦没捕虜追悼礼拝の追悼のことばの中から

第1回（1995年）

関田寛雄氏（同墓地で毎年夏に催される礼拝で追悼の辞を読み上げてきた牧師）：東久邇宮総理が「パールハーバーを忘れて欲しい、我々も広島・長崎を忘れるから」と言ったが、両方とも忘れないで覚えて置いて欲しい……狼は子羊とともに宿り、豹は子山羊とともに住む、の教えに従って、世界民族共和を願う。

第3回（1997年）

関田寛雄氏：知覧平和記念館の学徒兵の遺書「眠れ、眠れ、母の胸に」英連邦墓地の墓碑銘のことば「私の息子のパットよ、悲しくも去ってしまった。私の愛する息子よ、会い見る時まで。母より」

元イギリス軍捕虜ダッドリー・ケイブ氏（来賓の言葉）ビルマ作戦同志会会長、：今私たちはここに共に立っています。共に赦し合うためです。

第6回（2000年）大庭昭博氏の報告内容：大庭氏は九州福岡の出身で、4年前に閉山した大牟田の三井三池炭鉱のフィールドワークに参加し、そこにあった捕虜収容所跡を訪ね、捕虜が過酷な労働を強いられて過去を確かめていた。そして、今日、そこで過酷な体験を余儀なくされたレスター・テニーさん（アリゾナ州立大学名誉教授）を迎えられたことを報告した。また、大牟田の女子高校生がその炭鉱跡を訪ね、捕虜が差別待遇の中で多くの命を落としていったことを調べ、戦争のないことを願っている報告もした。

レスター・テニー氏（来賓の言葉）：本日、私たちは全ての間人は平等に創られていることを意識しつつ、友情を持って心をつなげています。また、世界の各国が平和によって永遠に支配されることを祈ります。そして、憎悪がどのような理由であれ、どのような種類のものであれ、地上のどの国からも消滅し、全人類が平和のうちに生きることが出来ますよう祈ります。

最後に、英連邦を代表しての英国大使館付き武官の言葉の一部を、日本語訳がないので英文のまま載せていただきます。（私には良く分からないのですが、皆様には分かると思ひまして）

第7回（2001年）

Captain James Boyd, Defense Attache at the British Embassy This memorial service serves as a most fitting and admirable occasion with which to promote this process as well as pay our respects to those who are commemorated here. It reveals the depth of feeling of those involved and truly

demonstrates the warmth in the relationship between the Japanese people and the former Allied nations and British Commonwealth countries.

【参考文献】

- 「英連邦戦没者墓地 戦没捕虜追悼礼拝 平和と和解への道」斎藤和明・雨宮剛、青山学院大学、2002. 8。
- 「大日本帝国内地捕虜収容所」茶園義男、不二出版、1986. 12。
- 「捕虜は何故和解に傾けないか 英国捕虜問題における齟齬の構図」中尾和代、青土社、2000. 11。
- 「傷痍軍人の戦記」横浜市傷痍軍人会、神奈川新聞、1995. 8。
- 「極限の中の人間 死の島 ニューギニア」尾川 正二、筑摩書房、 1983. 5。
- 「ニューギニア砲兵隊戦記」大島正彦、光文社、2008. 11。
- 「真相 中国の南洋進出と太平洋戦争」田中宏巳、龍溪書舎、2021. 3。
- 「連合軍捕虜の墓碑銘」笹本妙子、草の根出版会、2004. 8。